

統にはぐくまれた成田に新しい時代を告げるかのように成田空港が開港すると、静と動が共存する中で国際文化都市への歩みが始められたのである。空港建設・開港が成田市に及ぼした影響について、まず人口面では、建設時に一時的に社会減が発生したものの、主として空港内に従業者の市内居住に伴い、昭和40年から55年の間に大幅に増加した。経済・産業構造面では、空港内事業所及び関連産業の立地に伴い、運輸・流通業を中心として第3次産業従事者が増加した。更に、建設業・製造業といった第2次産業の従業者も増加し、成田市は、空港開港後、周辺地域の中では雇用提供の場へと変化した。生活環境面では、東関東自動車道・国道51号・国道295号等の幹線道路網が整備され、都心へのアクセスが改善された結果、市民の交通利便性が格段に向上するとともに、成田N.T.の整備等に伴い下水道・公園等の生活環境施設の整備水準も向上した。更に人口増及び来港者の発生・増加に対応して大型店・ホテル等が立地し、こうした機能へのアクセスの向上及び選択の幅の拡がりにより市民生活の向上がみられた。しかしながら、航空機の離発着の開始に伴い、騒音が発生するとともに、空港利用者の来港によって交通量が増加した為、騒音・振動の発生、交通事故の増加が見られた。ただし、航空機騒音に対しては、小中学校校舎の防音化を始めとして各種の対策が

行われている。財政面では、空港関連産業の立地を背景として、市税・固定資産税を中心として歳入が増加する一方、建設事業費を中心とする歳出も増加したが、全体としての財政力は昭和49年度より地方交付税不交付団体となっており（昭和53年度を除く）、強化されたといえる。以上のように、成田市は国際空港の建設により様々な面に変貌をとげ、建設決定以降の約20年間は成田の歴史の中でも非常に密度が濃いものとなったわけであるが、現在の成田にとって新勝寺の存在はどのようなものとなったであろうか。

一般に、宗教団体の影響下にあった都市が何らかの他の経済的要因で発展した場合には、都市の拡大に反比例して宗教団体の影響力は次第に拡散され薄れてゆくものと思われるが、その場合でも、その都市と宗教団体との歴史的・伝統的な結びつきの深さを考慮すると、その影響力は予想外に根強く存続する。成田市においても国際空港の設置を契機に新勝寺の勢力は薄れ始め、次第に門前町としての特質を失う傾向にはあるが、新勝寺は特に住民意識の面において未だその勢力を存続させ、挽回しようとしているようにも見える。21世紀を射程に入れた様々な国際空港都市構想による成田市の変化を新勝寺がどう受けとめてゆくか興味深い。

愛知県渥美町における農業の発展と最近の変化

森 田 明 子

渥美町は愛知県において最南端である伊良湖岬を有する町で、渥美半島最先端の町である。ここは古くから、横半島という地形条件のために、東西の結節点として栄え、現在においては、東京・大阪の東西2大市場の中間に位置するため、近年産業（農業）が活発化している。この地の気候の温暖性により、渥美町は全国屈指の農業地域になっている。渥美半島内では、大分すると3つの農業（施設園芸、露地野菜、畜産）があり、この町はそれを集約した形で地域分化をしている。

年間粗生産額は平均的に200億円を越え、一戸当りの販売金額は、総農家数の30%以上が、8桁

（1000万円）以上をあげている。一戸当りの農業所得においても県下では、田原町、赤羽根町に次ぐ第3位となっている。更に、農家数においても純農村的傾向はつよく、専業農家率が55.9%となっており、全国の農村が兼業化の深化を示すのにもかかわらず、その傾向は深まる一方である。

しかし、このような状況は以前より存続してきたわけではなく、昔はむしろ“貧農地帯”であった。気候の温暖性には恵まれているものの、半島全域が弓張山脈の延長である天伯原につづく洪積台地からなり、地質は強酸性で乏水地帯であったため、慢性的な水不足に悩まされていた。このた

め、農業をはじめ、特徴的な産業は発達せず、半農半漁の地域にとどまっていた。そのような状況から脱却しようと、豊川用水の通水やその関連事業、構造改善に積極的にとりくんだため、現在の状況に至っている。

このような渥美町の農業についての発展過程、現状から最近においての変化を明らかにすることを研究した。その過程で最も渥美町農業の発展といえる西山地区を取りあげた。

発展の過程で豊川用水の開通が当町の農業に絶大な影響を与えているのはもちろんであるが、もうひとつ上記の西山地区の開拓が挙げられる。土地利用の変化をみていくとその様子が明らかである。この地区は現在、量産の野菜の主要生産地域であるが、戦後開拓をうけるまでは、陸軍野砲場地として利用されており、南部には砂丘が発達し礫土の多い一面のクロマツ林地帯であった。

開拓の初期は、土地条件が悪く又、度重なる自然災害のために、なかなか成果は上がらなかった。しかし数々の構造改善や、環境整備事業に取りくんだため、現在のような状況にまで発展したのである。

この地区の作付は露地野菜の中でも、冬キャベツと初夏スイートコーンの組み合わせが多く共に暖

地性を生かし、市場における他の産地間の出荷の空隙を狙って生産、出荷している。俗に西山地区と言うのは、開拓地区全域を指し、入植・増反を含めた地区を言う。このため、入植者の居住する“西山集落”が全くの新しい地区といえる。そこで、詳細な特色を考察する段階では、この“西山集落”を対象にした。数値的な特色では、専業農家率が町内で最も高く87.1%を示すこと。若年層の就業割合が他と比較すると高いこと。大型機械の導入率が高いことなどがあげられる。また、最後に行った意識的な調査においても（他と比較していないためこの集落自身の傾向しか考えられないが）、後継者が、かなり存在すること、作物の転換への意欲、技術、機械の導入などに関して積極性が見られた。

このため、価格の不安定などにより、伸び悩みの時期に入っている露地野菜の経営も今後積極的に改善されていくであろうと考えられる。

近年、軽微ではあるが、他部門（特に施設園芸）において、コンピューター導入など、技術面で発展をみせ、近代化・大規模化が図られている。これまでの経緯からも、この先更に先端的な農業経営が行われていくことであろうと思われる。

都市化に伴う都市の水文環境の変化

——神田川水系を中心として——

山 上 陽 子

東京都の中小河川のひとつ神田川は、井の頭を水源とし、武蔵野台地を流れ、隅田川に注いでいる。江戸時代に上流部は上水の供給のため、下流部については舟運のためにそれぞれ開削が行われて、現在の流路が形成された。その後も改修事業が繰り返されてきた、いわば人工河川である。

昭和初期、神田川下流域や日本橋川流域では、70～80%が既に市街地化されていたが、神田川上流域や善福寺川、妙正寺川流域の市街地率は20%にも満たず、水田や畑、樹林地が広がり、神田川流域全体としては十分に、保水機能や遊水機能を備えていた。

しかし、昭和20年以降は神田川上流・中流域や神田川水系の善福寺川、妙正寺川流域では、首都

圏のベッドタウンとして急激な人口増加と都市化が始まる。昭和30年代になって、この地域の市街地率は70～80%となり、わずか十数年間で3～4倍の伸びを示した。流域のほぼ中央を通っている、JR中央線を中心に各鉄道、道路が整備されていたことも、急激な市街地の拡大に影響している。下水道は流域を全体的に見ると、昭和40年代初めは約半分しか普及していなかったが、昭和50年には下水道普及率が95.7%に達し、その10年の間に急速な伸びを示している。現在、流域の市街地率は94%で、流域内の人口は175万人であり、東京都区部中小河川流域の中でも、最も人口や資産の集中している流域であるといえよう。

市街地化に伴って、流域の水文環境には変化が